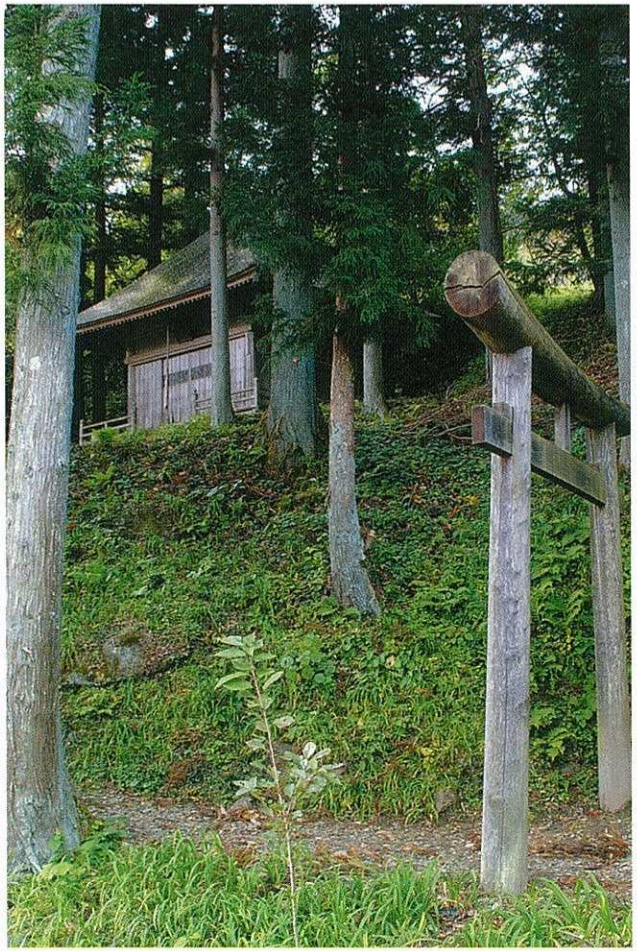


自然に委ねた素朴さのなかに強いインパクトを与えてくれる霊界

入口を示す案内柱

陸前高田市横田町字舞出

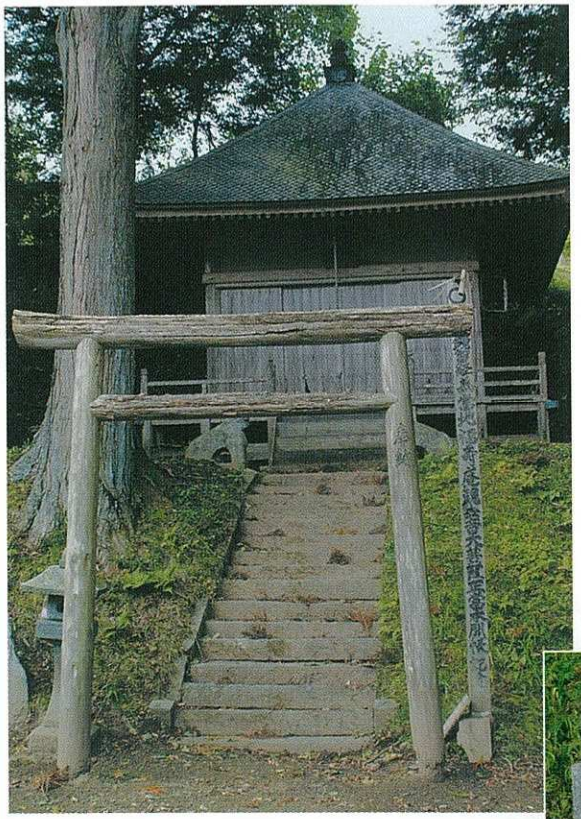
平栗（ひらくり）福寿庵の別当菅野家は、屋号「平栗の大家」と呼ばれる旧家で、先祖は大和の国（奈良県）から観音様を背負って落ちてきた武将とのことでした。　他の落人がそうであるように、身を落ち着けるや真っ先に観音堂を建立して祀ったのです。

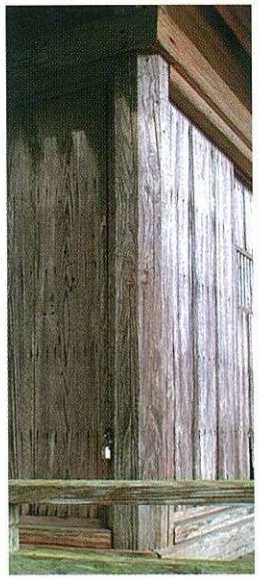
現在見ることのできる御堂は、昭和五十八年、菅野家の現当主早男氏の建立になるもので、二間四面、秘仏　聖観音菩薩像が安置されているほか、武者の絵馬や歌額、鹿踊りの絵などがかざられ、境内表面には、中開帳を記す供養塔が立っていました。

落人の里ですから、国道沿い「舞出橋」からかなり奥に進んだ場所ながら、現在では、よく整った耕地の開けた空間が出来上がっており、観音堂の周囲も霊地にふさわしい雰囲気を保持しています。

ちなみに、平栗大家の先祖は、気仙三十六騎を誇る家筋と聞き及んでいます。

かりのよと思へど
さすが すてかねて
ふかくもいのる
福寿なりけり



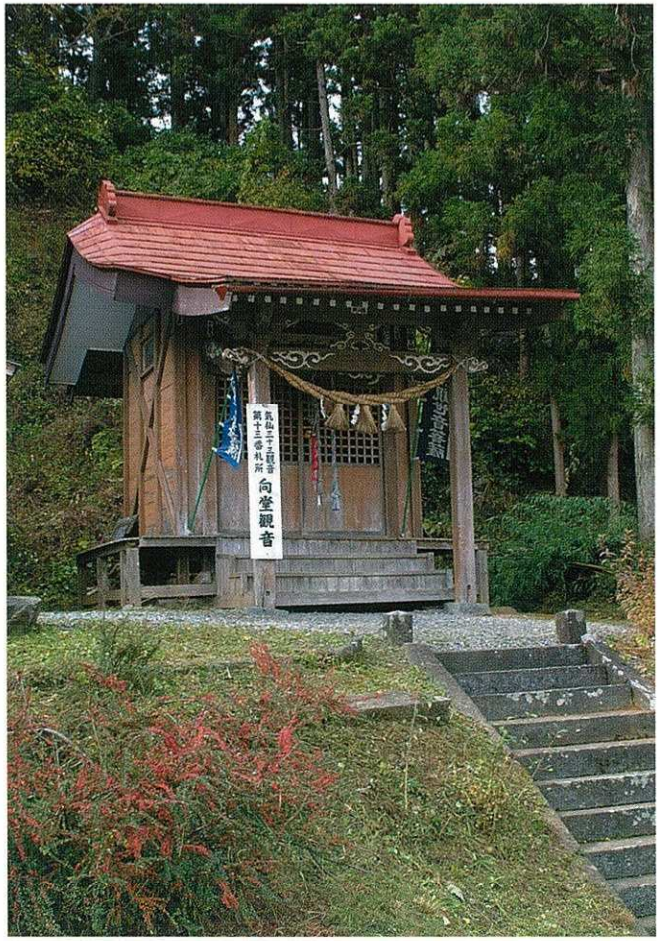


御堂造作、六角柱（左）と、上がり口の石碑や灯籠

十三番札所　向堂観音堂

十一面観世音菩薩

ごくらくに
われをむかえの観世音
つかひおがまぬ人はあるまじ



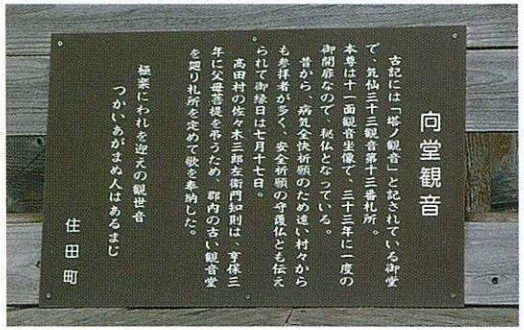
気仙郡住田町世田米字川向

向堂の創建は不明ですが、別当千田家の持仏堂だったといわれ、別の名を「塔の観音」とも称されていました。度々の再建記録が残っていて、慶長七年（一六〇二）の御堂再建の際は、光勝寺の住職が入仏式の導師をされています。

光勝寺の縁起書によりますと、永禄五年（一五六二）矢作の鶴ヶ城主因幡守重久の娘が米ヶ崎城に御輿入れしましたが、婚礼当日から気

十三番札所　向堂観音堂（むかいどうかんのんどう）

継承されてきた吊り銅鉦



住田町で設置された解説板

不動明王像塔

分爽快ならず、昼は昏睡状態、夜は晴眼して眠ることの出来ない月日が三年つづきました。万策尽き果てたころ城主の夢枕に、「前世罪業の罪深き故、一つの塔を建立して十一面観音を安置し後世を願うべし」との暗示があり、安波守即、これを実行したところ、全快したというものです。

寛永四年（一六二七）と宝暦七年（一七五七）にも御堂を再建・修復を施しながら、安産の守護仏として内外の信者を集めてきましたが、大正期に入り、別当千田家では堂宇等一切を隣接の浄福寺に寄進し、現在は小さな御堂を再建、管理は浄福寺が行っています。

なお、ご本尊十一面観音像は、室町時代の特徴を備える優れた彫刻で、安阿弥の作とも伝えられ秘仏となっています。

聖観世音菩薩

山門

くもゐにも
ひびきやすらん
法の声
空ゆくかりも
しばしとどまる

気仙郡住田町世田米字本町

満蔵寺は中世の世田米城（上原館）阿曽沼重範の菩提寺で、満蔵庵と称していたといいます。

寛永の頃、キリシタン禁止令が出されたおり、各村々に村寺が定められ、当山は「村寺」とされて明治まで続きました。その間、本堂・庫裏・山門・楼門等整備されてきましたが、文化十一年、火災に見舞われ、楼門を残しすべて消失、再建に五十年を要しています。

この楼門は、慶応３年、普門寺の楼門が火難で焼失した無念を受け、地元大工の総力により、かつての姿をこの地へ再現させたものといわれる

境内の至る所に安置された石仏

明治の初め、現在の県立住田病院の敷地を寺地としていた松林山秀蓮寺の廃寺に際しこれを合併、古碑や仏像等を満蔵寺へ移しました。秀蓮寺は地蔵尊信仰を主体としていたので石仏が多く、数十体の地蔵尊を移設されたことになりますが、その識別は不明とのこと。

また、昭和の初めには、町内和山の世田米城（下舘／二の丸）阿曽沼広長の菩提寺　杉月山新城院も廃寺となり、仏像・仏具一切が移され、その中に、身丈一尺余（約三〇センチ）の観音像が伝えられていると言いますが、やはり識別は不明とのことです。

当寺は檀信徒数百を擁し、気仙随一と言われる山門や気仙大工の技を誇る扇タルキの鐘楼堂など見るべきものが随所にあふれ、境内の散策だけでも十分心癒される感があります。

十四番札所　満蔵寺

観音尊像が多数安座している本堂

扇タルキの美を誇る鐘楼堂（元治元年建立）

幕末の頃開設された寺子屋の門弟による顕彰碑

岩手県初の孝婦として褒賞された 大條礼女 の墓碑

十五番札所付　古屋敷観音堂（ふるやしきかんのん）

古屋の沢観音堂

いままでは
かかる仏の
ましますと
しらで
すごせし
身こそ
つらけれ

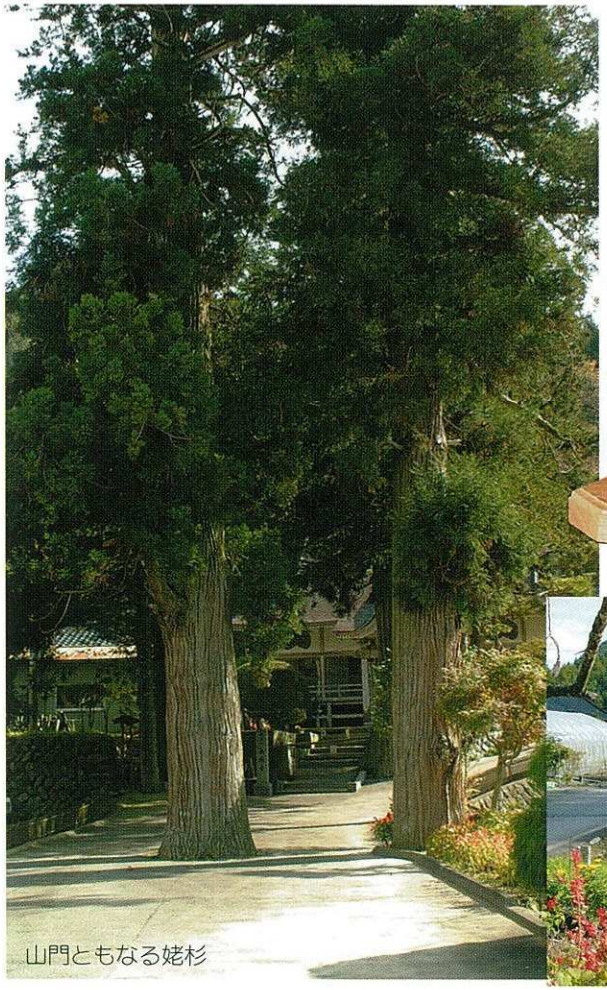
中清水（なかしず）観音は、以前、古屋（こや）の沢なる場所にあり、「古屋敷（こやしき）観音」と呼ばれていました。しっかりした造りの観音堂で、実は、大坂城落城に際し、吉田家の始祖で、九州宇土（うと）城主だった　宇部伊衛門直義なる武将がこの地に落ち下り、肌身にしていた「水月観音像」を、御堂を建立して祀り伝えたものです。一説に、飛鳥時代の仏師　止利の作とも伝えられていましたが、現在は「如意輪観世音菩薩像」となり、長桂寺に永久預け仏としてご本尊の右手に安座しています。

なお、古屋の沢の観音堂は、当家の

十五番札所　中清水観音

如意輪観世音菩薩

中清水観音の本尊仏如意輪観世音像



山門ともなる姥杉

氏神だった月山神社の社殿となり、跡地には、小ぶりな御堂が置かれ、別詣えの子安観音が祀られています。

吉田家には始祖から伝わる金剛鋳造仏「子安観音」もありましたが、明治の初め他者へ譲渡されてしまいました。宇部氏はキリシタンでしたから、この子安観音像はどこかマリアのおもかげを残していたといいます。

なお、宇部直義は以後、伊達政宗に名馬献上等により、吉田筑後正義なる名を戴きました。

御月山長桂寺は、平泉藤原氏滅亡後、葛西氏に従って舘を築いた当地千葉氏の菩提寺で、天文二十三年（一五五四）の創建となっており、これを機とするかのように、同系の寺院が気仙内に次々建立されていった時代と申します。

長桂寺は明治のはじめ火災に見舞われて、本尊仏と過去帳の一部を除

十六番札所　長桂寺

聖観世音菩薩

長桂寺本堂と聖観音菩薩立像

ながきよの
法のしるしや
玉桂
花咲く春に
あふぞ
うれしき

いてすべてを焼失しましたが、以後七〇年余にわたる尽力により、昭和十二年（一九三七）本堂の再建を見、昭和四十五年に至って庫裏を新築、他、伽藍・境内等も整備されました。

長桂寺の寺名は、北側に生えている桂の古木に由来するとのことですが、山門に居並ぶ杉の大木こそ、開山以来の生き証人、四五〇年の過去を伝える銘木になっているとのことでした。

聖観音尊像は本堂祭壇左手に安座されています。

鳥居と見まごう山門と迎え地蔵

竜沢山城玖寺は、磐井郡峠村から派遣された葛西の臣、松田大隅守の菩提寺で、封内風土記によると永正元年（一五〇四）の開基といいます。つい近年まで庵号で呼ばれていました。

中世の頃から既に赤羽峠をめぐる激しい攻防があったものか、葛西氏がここに山城を築かせたのは、赤羽峠の監視にあったといいます。「城玖」には「変更を防ぐ城」という意が含まれていそうです。

葛西氏が亡んで間もなく城は落とされ、松田氏は田野に帰りました。従って城玖庵も長らく衰退の一途をたどっていましたが、寛永八年（一六七三）黒石村の正法寺十七世により中興されたといいます。

藩政時代に変わっても藩境いをめぐる係争は続いていますので、城玖庵のはたした役割は小さくはなかったのでしょう。御本尊は聖観音菩薩座像でした。

城玖寺は、総じてその荘厳かつ峻厳な雰囲気を特徴とされているように感じます。境内のまわりが墓地ということもありますが、やはり、領土を守るという使命感のようなものが、伝統としてこの場所に凝縮されているような緊張感がみなぎっているせいかもしれません。

寺号に変えたのは昭和二十七年とのことでした。

観音尊像の安座する本堂

何故かこの渕にさえ厳しい霊気がかんじられ…

頼みおく
願いをみてん
紫の
空たつ雲に
われをむかえよ

聖観世音菩薩

ふだらくの
峰はいずくと尋ねきて
しばしとてかはやすむ坂本

愛宕神社の鳥居をやや端外に置いた坂本堂

坂本堂界隈

気仙郡住田町上有住字二度成木

坂本堂は、山岳信仰とも並ぶ自然物を霊地とした観音堂で、以前は「岩谷観音」と呼ばれていました。母衣下山の東側山麓が大きく張り出した岩窟地帯で、往時は赤羽峠にさしかかる場所でもあり、また、二度成木番所の手前でもあって、ここを峠(坂)の麓「坂本」と呼ばれていたといいます。

岩谷観音は、明治三十五年(一九〇二)「岩谷神社」と呼称がかえられましたが、観音堂は健在でした。

岩谷観音堂跡地

観音堂内装と御本尊仏

県道工事で取り壊され、他の御神霊ともども上手の旧家小野家の氏神だった「愛宕神社」の社殿に同居することになりました。

変化自在をもって知られる観世音菩薩様ですから、どこにあっても「補陀落」と言えるのでしょう。ちなみに、別当　小野家の先祖は、延宝三年より二十年間気仙郡の大肝入を勤めた家柄です。

岩谷観音堂跡地は、国道工事でさらに削り取られましたが、天然自然の霊地にふさわしい面影を今に残しています。幾つかの祠が飾られ、古碑も集められました。人の心を癒す力量はやはり自然物、時を経るに従い、より霊香をみなぎらせる聖地となるにちがいありません。気仙三十三観音最北端にあたる、いかにも補陀落が気にかかる札所といえます。

聖観世音菩薩

かつての栄光 観音堂基壇跡

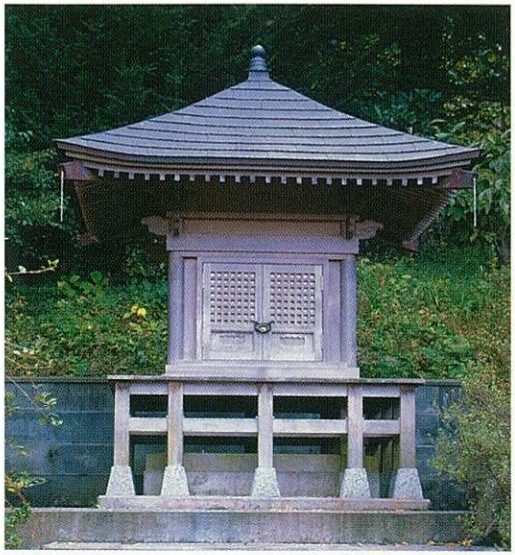
一字一石塔

往時の参詣道

大船渡市猪川町字久名畑

稲子沢の始祖は、修験者で荻野長門試元という方でしたが、日頃市石橋郷に土着して三代目に姓を改め「鈴木」を名乗りました。そして五代目の久七郎重周という人が、弟与次右衛門を分家して稲子沢を開かせたといわれます。

稲子沢の初代　与次右衛門は、享保十七年（一七三二）院殿居士称号の墓碑を残し七七歳で亡くなりましたが、その十年前の正徳元年（一七一一）には屋敷内に宝殿を創建して本尊仏ならびに西国三十三観音像を収められていたのです。



現在の観音仏祖祠堂

仙台領の高僧南山古梁の筆になる秋葉山碑

氏神　稲荷様

正徳に続く享保七年（一七二二）には宝形づくりの観音堂を建立。同十年には、善光寺に参詣して本堂常夜灯の修造費三五両を寄付、更に同十二年には、二代目　理兵衛を願主として、一光三尊の如来像を彫像させました。墓碑には「無量院殿観翁栄寿居士」ときざまれています。

以後、稲子沢は、華々しい発展を見せることになります。

三代目　利兵衛は、宝暦元年（一七五一）西国三十三観音に加え、阪東・秩父六十七体をも完成させて百一観音とし、三間半四面の観音堂を造営しました。

天保七年（一八三六）の凶歳にあたっては、仙台藩へ五千両もの貸上御吟味に応じていますが、近隣の

つみきえて
いまは
心のやみもはれ
いたるうれしき
法のうたはひ

平成16年4月　江刺市郷土文化館開館披露写真（東海新報社提供）

寺社への寄進もかなりの額です。参宮は代々行われ、伊勢大社へも多額の献納をされていますが、特に、参詣途中、伊勢までの川越し場に、自費で石橋を架設させた話が有名を馳せています。

こうした事跡が全国的に知れ渡っていたものか、文政の頃のある江戸本の表紙を飾る「全国長者番付の奥州版」筆頭に稲子沢の名がありました。

しかし、さしもの稲子沢も明治維新の社会変革を乗り切ることはできませんでした。藩政時代の商法は一気にその力を失い、代わりに慣例出費の法則が働いたのです。信仰心の厚い家風が負の追い風となって、ついに百一観音すべてを手放すことになったとのことです。

この百一観音像の顛末（てんまつ）については、若干の誤認があるように思います。行き先は最初からはっきりしていますが、経緯がさまざまです。「借金の形に取られた」とか「六百五十円で売った」とかの噂まで流れているのです。

稲子沢現当主のお話では、先代からの伝えとして、物商ルートに渡る危険を避ける目的で、当時信頼の寄せられる岩谷堂の資産家小原家にお預けしたとのことでした。その時の約束は三つあったと申します。「貴重仏にふさわしい保管であること」「参拝希望者にはいつでも拝観させること」「第三者の手にわたす際は事前に相談すること」。

近年、小原家から「ご当地で適当な保管場所が準備できれば返還してもいい」とのお話しもあって、当地の有志により奔走がなされたと申しますが、実現のめどを立てることができず、平成十六年四月、最終的に江刺市郷土文化館奥の院常設展示仏となったのです。

現在　江刺市郷土文化館奥の院所蔵

二十番札所　舘下観音堂

聖観世音菩薩

母屋とあまり変わらない規模を見せる持仏観音堂の鞘堂

大船渡市猪川町字久名畑

「舘下観音」は、以前、猪川舘の登り口にあったことによる呼び名で、稲子沢と同じく日頃市石橋「大村」の分家「船原崎」を屋号とする鈴木家の持仏堂なのです。現在地に移ったのは明治の末頃といいます。

移った当初は、内仏として仏壇に安置されていましたが、近年、二間半四面の欅や檜を使った立派な観音堂を建立し、二十番札所の役目を果たしておられます。

ここ久名畑地域は近年開発が進み、この観音堂は御本宅ともども大きな道路に挟まれる形になり、御堂はガラスの鞘に収められました。しかし、周りの植木が自然木さながらに成長し、霊地を守っております。

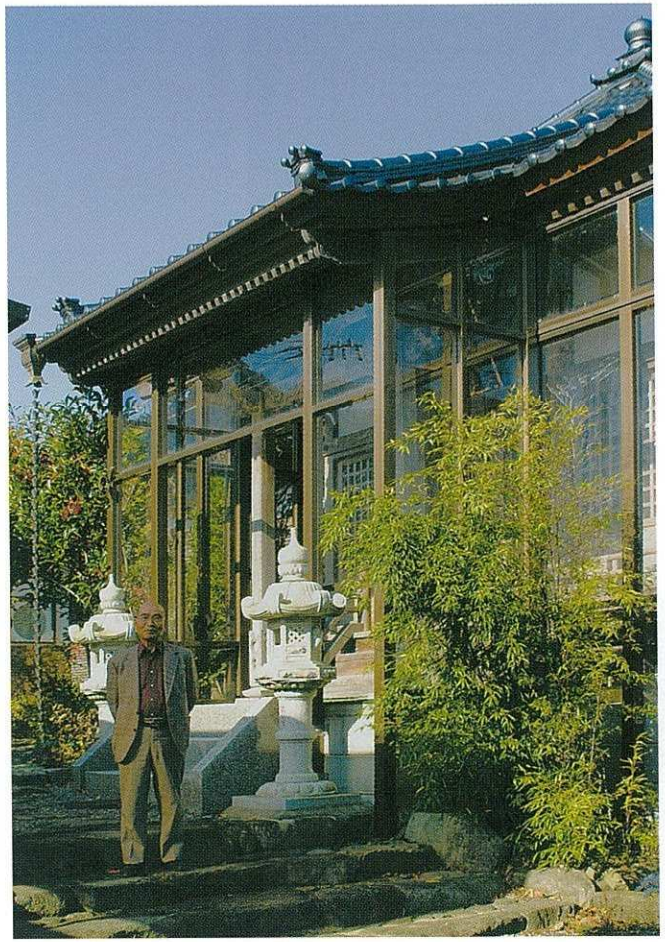
当家のご当主は仙台方面で暮らしておられるとかで、ご親戚の平氏にご案内を戴きました。

今回の取材では、堂宇の所在と沿革を中心として、内装や特に御本尊は秘仏も多い関係から、あえてこだわないことにしておりましたので、許可はいただきましたが、掲載いたしかねてしまいました。

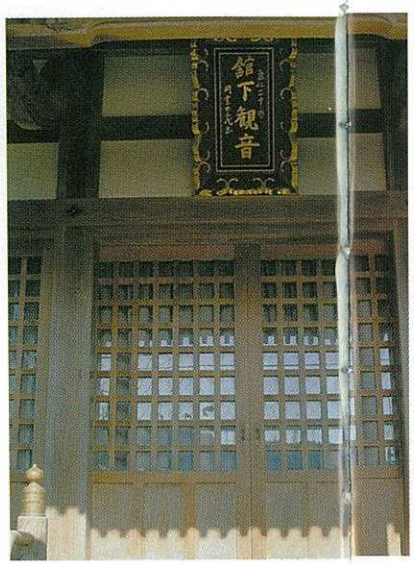
資料によりますと、聖観音菩薩像は、高さ五十センチほどもある座像とのことです。

二十番札所　舘下観音堂（たてしたかんのんどう）

ありがたや
深きつかひをたてとして
はこぶあゆみの
つゆやきゆらん



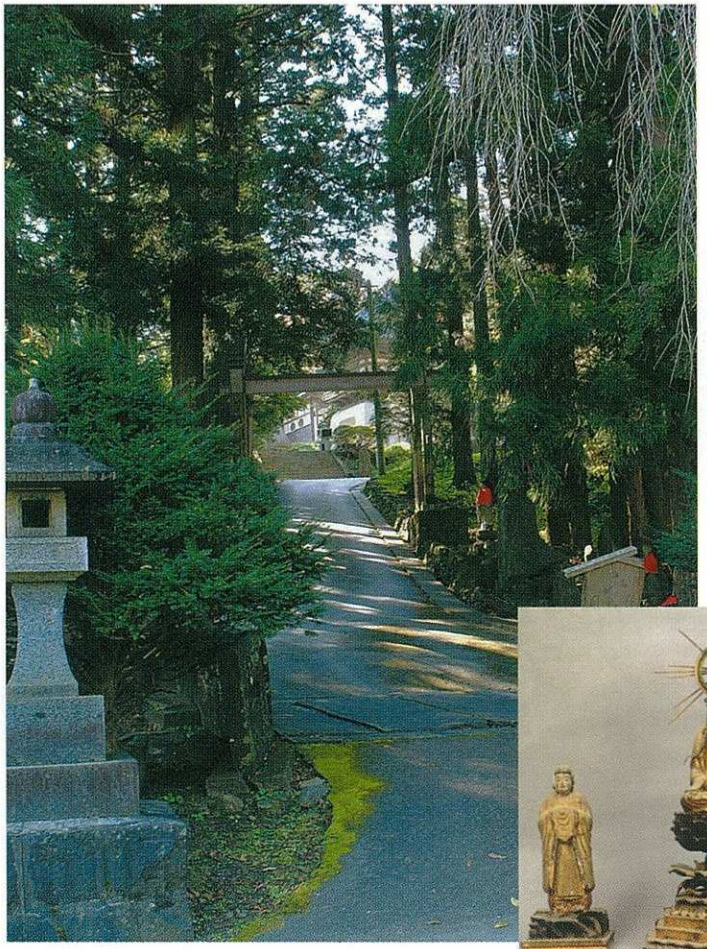
舘下観音堂正面と、一番別家にあたられる平氏



二十一番札所　洞雲寺観音堂

聖観世音菩薩

大船渡市盛町字宇津野沢



洞雲寺の幽玄したたる参道

秘仏、御本尊三体仏（右から）推古天皇、虚空蔵菩薩、聖徳太子像

法量山洞雲寺は、最近、長谷寺と並ぶ古寺と考えられています。寺伝として、東大寺の大仏建立に関し、勧進の任にあたられた行基僧正が高齢をおして布教に尽力されたのは天平宝勝（七四九）の頃で、それと重なる時代、猪川村富岡の地に「元基院」なる真言の寺があり、これが当寺の前身と考量されたのです。それを伝える本尊 虚空菩薩と、脇仏 推古天皇および聖徳太子像は秘仏として現在も祀られています。

宝筐印塔

稲子沢寄進の竜宮門

従って、これまで語られたきた根城城主　千葉備前守盛綱による永禄三年（一五六〇）の開創は「中興」ということになります。

中興開山に当たったのは、気仙で最初の曹洞宗普門寺を開いた如幻充察大和尚です。この方は南部石鳥谷の人で、伝えによりますと、出生したとき、夢のお告げがあって、大興寺の住職　充照和尚により墓所から救いだされて、養育されたと申します。

天正十八年（一五九一）葛西時代の終焉にあたり盛綱の後継が深谷で惨殺され、さらに慶安のころ（一六四八～五二）には洞雲寺が火災に見舞われて、以後四十年ほど廃寺同然の状態でありましたが、その再建にあたったのはの稲子沢家の二代　理兵衛重政という方でした。この人は、赤崎村肝入を勤めた屋号「小向」から入婿された方です。

洞雲寺の七堂伽藍建立に要した

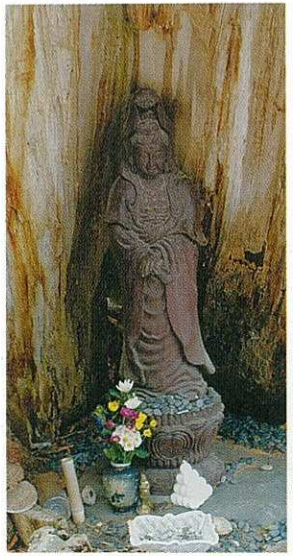
つかひには　いかでもらさん
ぎゃくえんも
同じうてなに
法のはちしば

観音堂

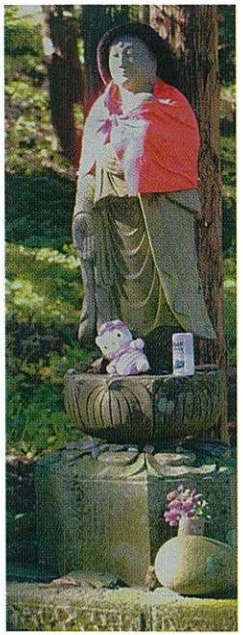
費用の七割は稲子沢の寄進と言われ、三割は、他の檀信徒の寄進に余地を残した配慮とも伝えられておりますが、とりわけ特筆されるものに、元文五年（一七四〇）建立の山門と寛延三年（一七五〇）寄進の観音堂および三十三体の観音像が上げられます。また、山門に安置されている釈迦・文殊・普賢の三体仏と十六羅漢像は、平成二年、京都の仏師により修復がほどこされ、江刺文化館所蔵の百観音に劣らない出来映えと申します。

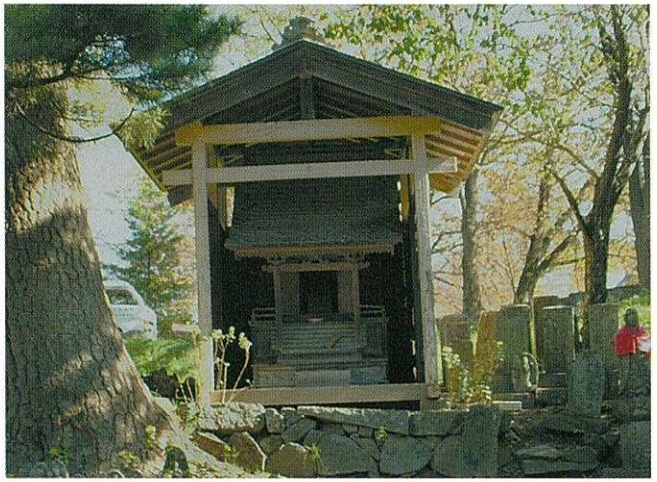
観音堂内に納められていた三十三体の観音像は、その後、六体が失われていましたが、明治になって一体加えられ、現在、二十八体安置されているとのこと。いずれも見ごたえある作品で、これにより気仙三十三観音第二十一番札所に選定されたのです。

他にも境内には特筆すべき石仏等、数多くありました。


古木の被災観音

五知如来


延命地蔵尊


蝦夷の神 法量権現

二十二番札所　長谷寺観音堂

十一面観世音菩薩

大船渡市猪川町長谷堂

無言で故事来歴を伝える観音堂左手寄りの古木、

気仙最古の供養碑。建保年間（一二一三～一九）のものという

長谷寺参詣門

長谷寺観音堂は、気仙三観音の筆頭に置かれます。田村麻呂鬼伝説では大同二年（八〇七）「赤頭　金丈丸」の首を埋めた場所に御堂を建て、十一面観音を祀ったというもので、この木造立像仏は、岩手県の文化財に指定され、研究者の中にも「伝説」と言い切ることに躊躇される方がおられます。

竜福山長谷寺の由来は、それから百四十年ほど下った天慶九年（九四六）となっております。その

二十二番札所　長谷寺観音堂（ちょうこくじかんのんどう）

今日の日も
いのちのうちとしらすなる
はつせの寺の　いりあひのかね

境内遠景と宝物収蔵庫

御堂裏手の不明碑石

頃は「長国寺」と書き、気仙郡司金氏が、近江の国石山寺から淳祐学匠を招いて開山させ、この地の祈祷寺としました。以後、平安から鎌倉にかけて郡内の信仰を集めていたといい、文化財的石碑は現在なお六十基ほど残っています。

しかし、その後は一三〇年にわたる衰退期が続いて、元亀三年（一五七二）地頭　江瀬兵庫とも江刺兵庫とも言われる人が再興させたといいますが、やがて火災に見舞われて衰運が続き、寛永二年（一六二五）に至って金剛寺住職　永証法印が現在地に移して建立、中興第一世となりました。

宝永元年、長谷寺観音堂立て替え時の発掘により、三十三本の「鬼の歯牙」が出土したことが明和の縁起書にあり、その歯牙は現在も所蔵されています。伝説とは言っても、中に秘められた史実の重みを感じる札所です。